

海外食料需給レポート

(2020 年 8 月)

令和 2 年 8 月 31 日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2020 年 8 月の主な動き	1
II	2020 年 8 月の穀物等の国際価格の動向	2
III	2020/21 年度の穀物需給（予測）のポイント	2
IV	2020/21 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報 中国の洪水被害と穀物の生産・需要動向	3

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	7
3	令和 2 年 2 月以降の食品小売価格の動向	8

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	7
3	コメ	1 1
II	油糧種子	
	大豆	1 6

【利用上の注意】

(概要編)

I 2020 年 8 月の主な動き

1 米国のとうもろこし、大豆の順調な生育

米国のコーンベルトでは、7月の天候に恵まれ、とうもろこしは順調に受粉期を過ごし、大豆も順調に着莢期を迎えている。

USDA(米国農務省)「Crop Progress」(2020.8.17)によれば、8月16日時点でとうもろこしのドウ率は76%(過去5年平均69%)、大豆の着莢率は84%(過去5年平均79%)と進展している。

こうした状況から、USDAの8月の穀物等需給報告では、とうもろこし、大豆とも単収が上方修正され、史上最高となり、生産量については、とうもろこしは3億8,808万トン、大豆は1億2,042万トンと前年度を上回り、過去最高(とうもろこし2015年産、大豆2018年産)に匹敵する豊作が見込まれている。

なお、8月中旬にアイオワ州を中心に中西部で発生した暴風雨(Derecho)の影響については、「Crop Progress」(2020.8.17)では、前週より良～やや良の比率がとうもろこし、大豆ともに減少している。なお、詳細は調査中としている。この影響は9月以降の需給報告に反映されると見られる。

写真 米国のとうもろこし 順調に生育
(カンザス州 8月20日撮影)



2 ロシア・ウクライナの輸出動向

報道によれば、一時乾燥懸念のあったロシアは、8月以降、2020/21年度の新穀の収穫が順調に進展している。USDAによれば、穀物全体で11,760万トン(うち小麦7,800万トン)で前年度より増加する見通しで、今のところ輸出規制は行っていない。

一方、ウクライナの2020/21年度の穀物生産量は、USDAによれば7,690トンで前年度より増加も、うち小麦については前年度より9.2%減の2,700万トンの見通しとなっている。なお、7月1日付けで政府が穀物輸出業者と穀物輸出に関する覚書(MOU)を交わしており、8月17日には、2020/21年度の小麦の輸出上限数量について、1,750万トンと公表した。

3 アジア諸国のコメ輸出動向

報道によれば、タイの米輸出業者協会は、乾燥による生産減と、バーツ高により、2020年のコメ輸出は過去20年で最低の650万トンにとどまると発言している。

一方、インドでは新型コロナウイルスの感染拡大から港湾労働者が確保できず、コメの輸出が遅延している。一方、ベトナムでは、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念による国内価格の上昇に伴い、一時的にコメの輸出価格が上昇し、8月中旬には、初めてタイの輸出価格を上回った。

II 2020 年 8 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、7 月下旬、190 ドル/トン台半ばで推移。ロシアの生産量の増加見通し、米国産小麦の作柄の改善から 8 月中旬に 180 ドル/トン前後にまで下落した。その後、アルゼンチンの乾燥による生産量の減少懸念やドル安による米国の輸出量の増加期待から値を上げ、8 月下旬現在、190 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、7 月下旬、130 ドル/トン前後で推移。米国の順調な生育進捗、豊作予想等により 8 月上旬にかけて 120 ドル/トン台前半まで下落した。その後、8 月中旬に中西部で発生した暴風雨の影響を懸念し、価格はやや上昇し、8 月下旬現在、120 ドル/トン台後半で推移。

コメは、7 月下旬、490 ドル/トン前後で推移。バーツ高や灌漑用水の利用制限によりタイ中央部、北部等で雨季米の作付けが遅れ、供給不足が懸念されることから、値を上げ 8 月下旬現在、520 ドル/トン台後半で推移。

大豆は、7 月下旬、330 ドル/トン前後で推移。米国の順調な生育進捗と豊作予想等により 8 月上旬に 320 ドル/トン台前半まで下落した。その後、8 月中旬に中西部で発生した暴風雨の影響や中国による米国産大豆の買付期待から価格は上昇し、8 月下旬現在、330 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2020/21 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 40 万トン上方修正され 27.3 億トン。消費量は、前年度より 40 万トン上方修正され 27.0 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を上回り 31.4%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月と比較して、小麦、コメで下方修正も、とうもろこしで上方修正されたことから、穀物全体で上方修正され 27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、小麦、コメで下方修正も、とうもろこしで上方修正されたことから、穀物全体で上方修正され 27.0 億トンの見込み。

貿易量は、小麦、コメで下方修正も、とうもろこしで上方修正され、4.5 億トンの見込み。

期末在庫量は、8.5 億トンと前月より上方修正され、期末在庫率は前年度を上回る。

(注：数値は 8 月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2020/21 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.1 億トン。消費量は前年度を上回り 6.1 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、17.8%となる見込み。

(注：数値は 8 月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：中国の洪水被害と穀物生産・需要動向

2020年6月から7月にかけて、中国長江流域等で降雨が続き、洪水が発生し、早期米に被害があったとみられる。一方、東北地区では降雨が少なく、一部で乾燥によるとうもろこしや大豆への影響が懸念されている。また、南部の雲南省では穀物に被害を与える黄色竹角バッタがラオスから飛来している。このうち、洪水による農産物の被害面積は約600万ヘクタールとなっている。しかし、国内の備蓄も十分あることから、中国政府は食料安全保障への影響はないとしている。

一方、需要面では、ASFの影響から減少した豚肉等の畜産物生産が回復しつつあり飼料穀物需要が増加している。最近の中国の穀物生産・需要動向についてまとめた。

1 穀物生産動向

(1) 長江の洪水

中国の長江流域等では6月～7月にかけて降雨が続き、洪水が発生した。

8月13日の中国政府の応急管理部の会見によれば、長江・淮河流域の豪雨により、中国で1961年以降最大規模の洪水となった。農産物の被害面積は約600万ヘクタールで

(うち110万ヘクタールが全く収穫できず)で、中国の農作物作付面積(約1.6億ヘクタール)の4%、コメの作付面積(約3,000万ヘクター

ル)の約2割にあたる面積に相当する。長江流域はコメの主産地であ

るが、2期作の早期米の収穫時期に当たり、農業農村部は、早期米の刈取りと被災した圃場での晩期米の作付けの促進を勧めている。一部報道では、1,100万トンに相当する穀物が被害に遭ったとみられ、政府が市場価格の安定のため、コメやとうもろこし等の備蓄穀物を放出したとされている。

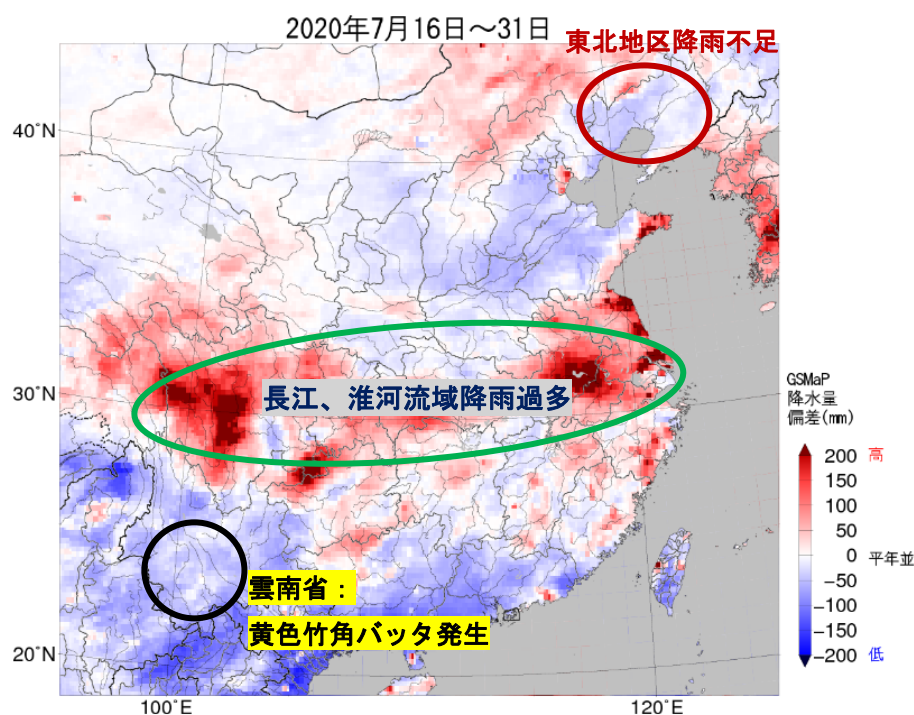
なお、米国農務省(USDA)の8月需給見通しでは、長江流域の降雨過多と洪水の影響で稲作に被害が発生し、2020/21年度のコメ生産量に関して、中国全体のコメ生産量(約1億5千万トン)の1%強に当たる200万トンを下方修正している。

(2) 東北地区の干ばつ

一方、東北地区のうち、特に西部では降雨が少なく、とうもろこしや大豆の生育への影響が発生した。応急管理部によれば、7月の干ばつ被害は遼寧、吉林、黒龍江、内蒙古自治区の4省に広がり、農産物の被害面積は110万ヘクタールとなっている。

なお、8月の降雨等で被害が緩和されたとみられ、USDAの8月の需給報告では、とうもろこし

図1 中国の降水量データ(平年差)



出典 JASMAI プロダクト

や大豆の生産量については7月予測から変更されていない。

(3) 害虫の発生

近年、気象条件の変化等からアラビア半島や西アフリカで発生したサバクトビバッタがインドまで襲来している等、国境を越えた大規模な害虫の被害が報道されているが、現時点では中国にはサバクトビバッタの襲来は確認されていない。

しかし、ラオスとの国境沿いの雲南省では、黄色竹角バッタの被害が報告されている。農業農村部によれば、発生面積は森林を中心に0.9万ヘクタールと今のところ軽微とみられるが、7月末には雲南省で、広西チワン族自治区、貴州、四川省の担当者も参加し合同防除訓練を実施した。

その他、前年中国に侵入したとうもろこしに被害を与えるツマジロクサヨトウの対策も行っている。

2 穀物需要動向

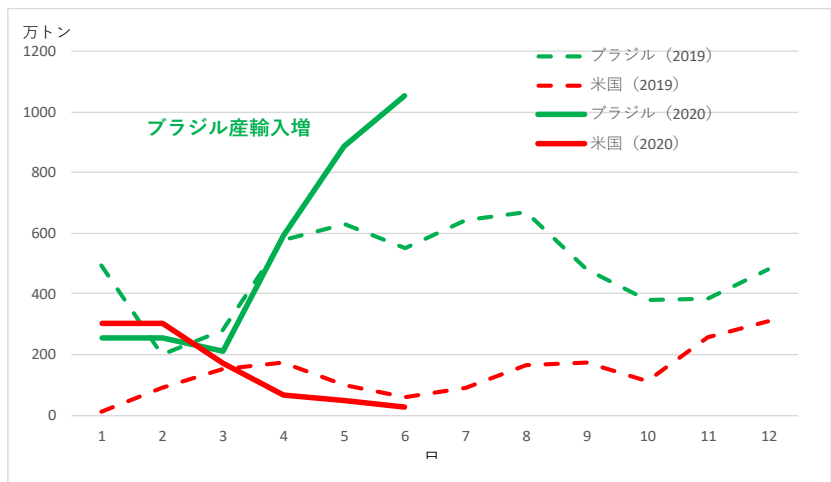
(1) ASFからの回復による大豆、とうもろこしの需要の増加

2020年に入り、ASFの影響で落ち込んでいた豚肉生産が回復するに伴い、飼料用のとうもろこしや大豆粕の需要も前年度より増加している。それに伴い、最近の中国の大豆輸入量、とうもろこし輸入量も増加している。

2020/21年度の大豆については、USDAによれば、需要量、輸入量とも史上最高を更新する見通しである。2020年4月以降、2019/20年度に収穫されたブラジル産大豆の輸入が増加している。なお、2020年後半は、米国の2020/21年度産の収穫に伴い、順次米国産に切り替わるとみられている。また、国内取引価格は上昇しており、農業農村部によれば、7月の山東省の大豆搾油工場渡価格は、5,840元/トン（前月比9.9%上昇、前年同月比40.5%上昇）となっている。

一方、とうもろこしについても、需要増加により国内取引価格が上昇し、農業農村部によれば、7月の産地卸売平

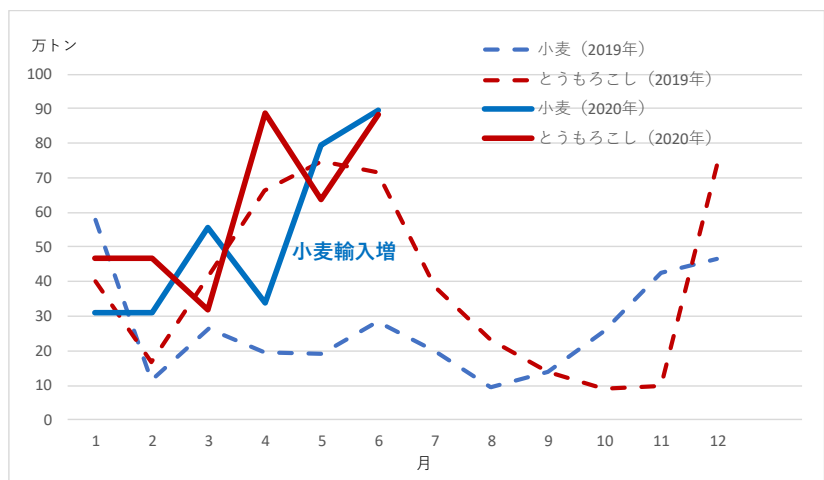
図2 中国の大豆のブラジル・米国からの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため1/2で按分

図3 中国の小麦、とうもろこし輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため1/2で按分

均価格は 2,140 元/トン（前月比 4.5%上昇、前年同月比 11.7%上昇）となっている。この結果、価格が比較的落ち着いている輸入とうもろこしの内外価格差が拡大したため輸入が増加し、米国穀物協会の 7 月プレスによれば、中国から過去最大の買付があったと発表している。

（2）小麦の需要の増加

小麦については、6 月に収穫された新穀が市場に出回ったが、とうもろこしの国内価格高騰に伴い、飼料向け小麦需要が増加したことから、価格は上昇している。一方、2 月以降の小麦の輸入量は、高品質小麦の需要増から、前年同月を大きく上回っている。

なお、コメについては、夏期を迎え需要が低調なため、価格は落ち着いた動きを見せている。

3 我が国の穀物輸入への影響

今般の洪水等の被害について、穀物で 1,100 万トンに達するとの報道もあるが、USDA の推計によれば、中国はコメ、小麦、とうもろこしを合わせて国内需要量の 1 年分近くに相当する 4 億トンを超える穀物備蓄を保有している。なお、小麦については、長江の洪水発生時には主産地の華北平原では収穫が終了していたとみられ、中国国家統計局の 7 月 15 日報告によると、過去最高の収穫となったとされており、被害はほとんど受けていないとみられる。仮に 1,100 万トンの穀物が被災したとしても、5 億トンを越える中国の穀物生産量の 2% 以下で、備蓄の放出によって十分対応可能とみられる。応急管理部の 8 月 13 日の記者会見でも、長江の洪水被害は国内の食料安全保障に影響しないとしている。

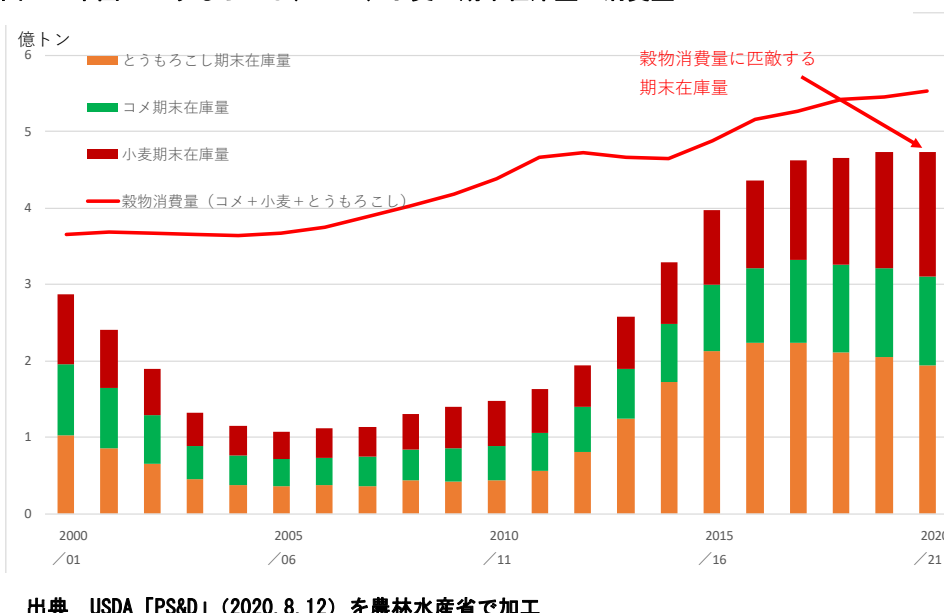
仮に中国が不足分を追加で輸入しても、とうもろこしや大豆に関しては、豊作の南米産に加え、米国でもコーンベルトで天候に恵まれ、とうもろこし、大豆が順調に生育しており、豊作が見込まれている。現時点では、中国の穀物輸入に関し、国際価格への影響が多少あることは否定できないが、世界的な需給で考えれば、十分まかなえるとみられる。

なお、コメに関しては、仮に輸入が増加しても、我が国はコメを自給できることから、影響はほとんどないとみられる。

最近の中国の穀物需要の増加は、洪水の影響よりむしろ ASF の影響で減少していた養豚向け飼料需要が回復しつつあることが要因とみられる。

中国の穀物需要量は世界の需要量の 2 割以上を占め、中国の大豆の需要量は世界の 1/3 を占めるなど、中国の動向が国際穀物需給に与える影響が大きいことから引き続き注視していく。

図3 中国のとうもろこし、コメ、小麦の期末在庫量と消費量

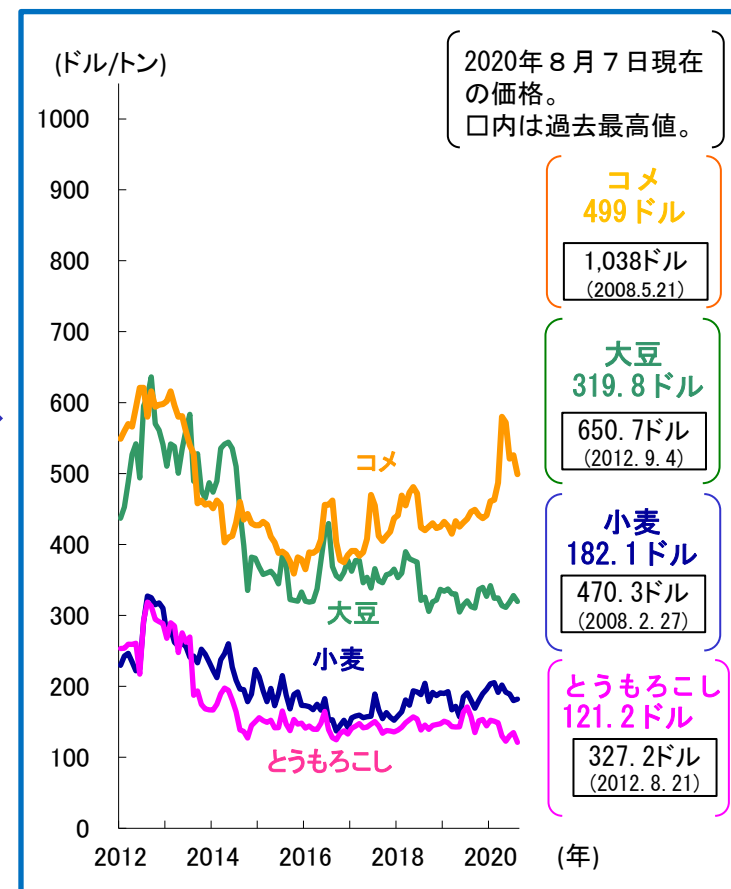
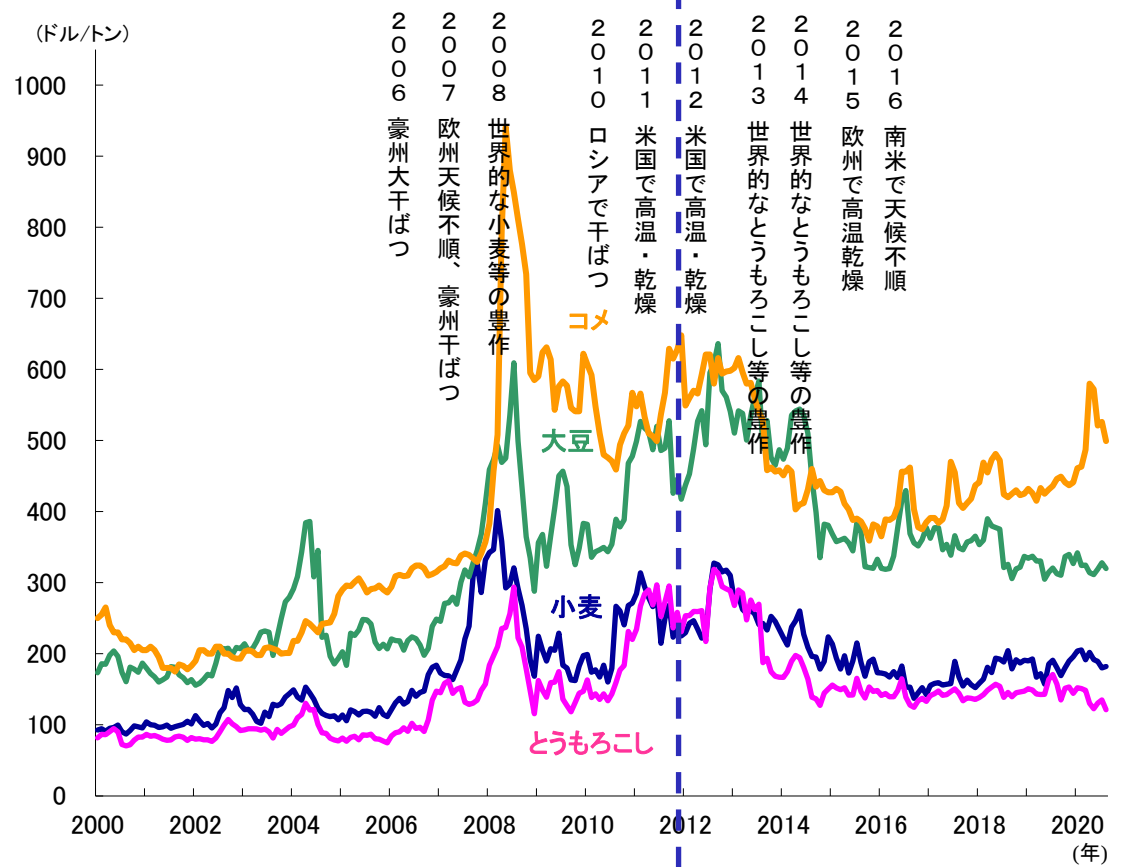


出典 USDA 「PS&D」 (2020. 8. 12) を農林水産省で加工

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。
2017年以降ほぼ横ばいで推移。コメは、2013年以降タイの在庫放出等から低下したが、2020年ベトナムの輸出枠の設定等により3月末から上昇した。4月末のベトナムの輸出枠の解除等で下落したものの、依然として高止まり。
- なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



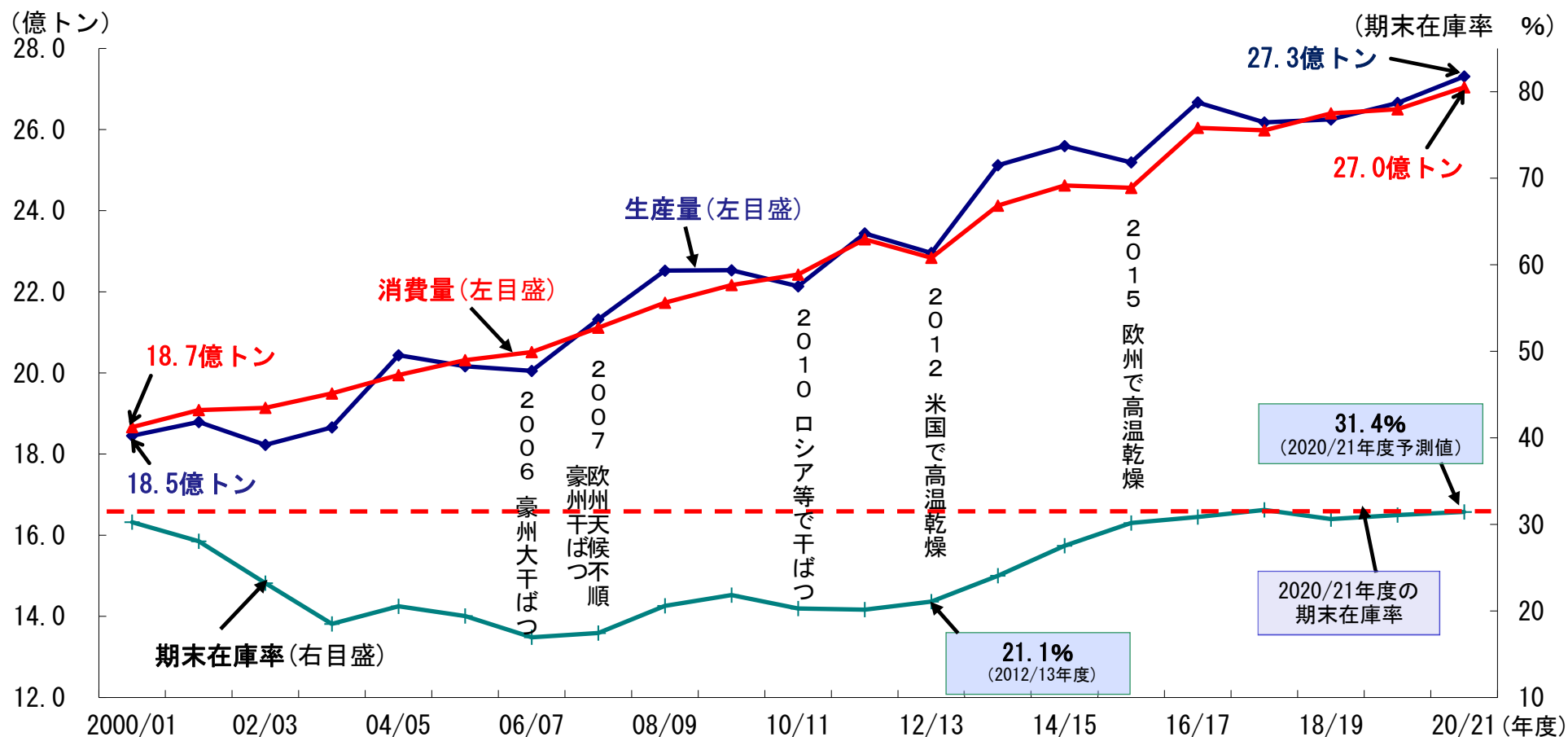
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2020/21年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2020/21年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回ることから31.4%となり、直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(August 2020)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 令和2年2月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

令和2年2月～令和2年7月の 食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)													
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前年 同月比)
生鮮食品を 除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.7	101.9	101.9	101.6	101.6	101.6	101.6	0.0%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.3	101.8	101.2	101.6	101.2	101.5	101.2	-1.4%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	102.4	104.9	104.4	105.0	103.7	104.5	104.9	0.0%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.0	101.5	101.4	101.5	101.7	101.7	101.6	0.6%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.8	91.9	92.1	92.6	92.9	91.8	92.3	-1.0%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	101.4	101.7	102.4	102.5	102.8	102.7	102.8	1.4%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	102.9	102.3	101.2	102.5	99.9	101.3	101.1	-2.1%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.3	102.3	102.2	102.1	102.2	102.1	102.6	0.0%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.1	93.9	93.9	95.2	95.3	94.8	94.1	-1.2%

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】令和2年3月～令和2年8月の 食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)															
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	103.2	101.6	102.3	103.2	101.9	101.6	101.0	-0.6%	-2.1%	
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	105.3	107.9	108.5	107.9	107.9	107.9	107.2	-0.6%	-1.2%	
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	95.7	95.1	95.5	97.1	95.5	94.3	94.3	0.0%	-0.8%	
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	100.1	96.8	97.4	97.1	97.1	96.2	97.1	1.0%	-2.1%	
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	111.0	110.6	110.8	112.9	110.6	110.1	111.0	0.8%	0.4%	
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	105.7	105.3	105.3	100.6	102.7	104.8	104.8	0.0%	-0.9%	
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.7	103.0	103.4	103.7	103.4	103.2	103.4	0.2%	0.7%	
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	102.4	100.0	100.4	100.0	99.3	98.3	99.0	0.7%	-2.4%	

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4:令和2年4月の調査は、東京都、大阪府、埼玉県、千葉県、神奈川県、兵庫県、福岡県での調査を中止し、5月の調査は東京都、大阪府、北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、兵庫県、福岡県での調査を中止し、6月の調査は全国で再開したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。